

ユングイの笛

——「とうげの旗」傑作選——

信州児童文学会・編 北島新平・画



913 しんしゅう じどう ぶんがくかい

創作児童文学 26

ユングイの笛

信州児童文学会・編 北島新平・画

東京 岩崎書店 1982 192 p 22cm

創作児童文学 26
ユングイの笛

一九八二年七月一日 第一刷発行

著者 信州児童文学会

発行者 森山甲雄

発行所 株式会社岩崎書店

文京区水道一―九―二

〒一一二 電話八一二・九一三

振替 東京七―九六八二二

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 株式会社若林製本工場

八三九三―九三二六八二―〇三六〇

© 1982, Shinshū Zido Bungakukai & Shinpei Kitazima

Published by IWASAKI SHOTEN, Tokyo, Japan

ユングイの笛

——「とうげの旗」傑作選——

信州児童文学会・編 北島新平・画



もくじ

かみゆい草 浅川かよ子……………5

春の歌 齊藤久志……………17

小石を十二つみあげて 寺島俊治……………21

兄の笛 和田 登……………37

ユングイの笛 大坪かず子……………49

星が一すじ流れたと 高橋忠治……………69

フクちゃんの勲章 羽生田 敏……………75

文さん はまみつを……………87

赤いシグナル 塚田正公……………93



死んでしまったコスイ	小口 明……	117
昔の夜	和田 茂……	125
流れる川	石原きくよ……	129
まつり	下井和夫……	141
平十となしの花	加藤明治……	155
霜 しも の朝	須田ゆり子……	169
イネの花	大日方 寛……	187
おわりに	和田 登……	190

表紙・口絵・さし絵 北島新平



浅川かよ子

か
み
ゆ
い
草



わたしが小さかったとき、子どもたちは、野原のいろいろな草や花に、みんなで考えた名前をつけてよくあそんだものだった。

ギシギシは、その実をこいて葉っぱの皿にもり、ごはんにしてあそんだのでごはん草。ツクサは、二枚のむらさきの花べんの間から、ちよっぱりのぞいているきいろのオシベが、あんなのでまんじゅう草。オヒシバは、何本かわかれて出ている穂の先を曲げひとまとめにしてしぼり、こうもりにしてあそびこうもり草。ヒデリコ、チャガツリ、カヤツリグサ、マツカサススキは、花火のように茎の先に穂がばつばつとついているのはなび草。ノアザミは、花をつみとって胸につけ、くんしょうにしてくんしょう草。ジャコウソウは、小人の三角帽のような花を指にはめ指はめ草と名づけた。

このようにわたしたちと仲よかった野原の草や花を、ひとつひとつあげていったらきりもないが、どの草にもどの花にも、うれしかったことや、かなしかったことなどの思い出がいっぱいだ。中でもいちばんふかい思い出のあるのがかみゆい草だ。

かみゆい草のほんとうの名前はわからないが、かみゆい草は湿地に生えていて、ひと株の根もとから、幅一、二ミリ、ながさ四、五十センチの葉がぞっくりでており、さわると女の人の洗いがみのようにサラサラしていた。

わたしたちは、この草を一本一本ぬきとり、ひとにぎりほどの束にまとめ、日本がみを結うときのかものようなつもりで、かみゆいごっこをしてあそんだものだった。

夏になり、かみゆい草がのびてくると、わたしら女の子たちは、てんでに、自分で作ったかみゆい草の



かもじを持ちよって、あっちにひとかたまり、こっちにひとかたまり、かみゆいごっこで時のたつのをわすれた。

「三つあみが、こんねにきれいにあめたよ」

小さい子どもにとって、草をきちんと三つに分けることはむずかしく、なかなかうまくいかない。そこで、なんべんもといへはあみ、あんでほといっているうちに、だんだんうまくあめるようになっていった。

「おら、まだ四つあみが知らねに、おせえてくろや」

小さい者たちは、つぎつぎにあたらしいことを、大きい者たちに習ったものだった。

「ほれ、ほれ、ももわれだぞ」

「こっちゃあ、しまだだぞ」

ももわれは若い人のかみ型がた、しまだはおもに嫁入りよめいりのときのかみ型、ふたつのかみ型は、わたしら女の子にとってあこがれのかみ型だった。

だが、いくらかみゆい草が、かみの毛のようだといっても草は草、ほんとうのかもじのようにには結ゆえない。それでもわたしたちは、ももわれなら、ひとつだけ輪わを作ってももわれだといひ、前がみのようにまゐるくふわーと浮かせて、それがしまだだといひ、たのしみあったものだった。

あれはわたしが一年生の夏のことだった。

その年はどういふわけかかみゆい草がすくなくて、大きい者たちにみんなとられてしまった。

「清水しみずのどころへいけや」

「三萱みがやの草場へいってみるか」

わたしは小さい者たちを引きつれて、大きい者たちといっしょにいったところを思い出しては、毎日かみゆい草をさがし歩いた。

だが三萱の草場ではおじいに、

「この草どろぼうめ！」

と、追っぱらわれ、とおくの清水のわきでる山のふもとまでいっては道にまよった。

「二江ふえちゃんについていったって、ちっともかみゆい草なんかとれねえわ」

とうとうわたしといっしょに、かみゆい草さがしにいく者はいなくなってしまった。

だがわたしはそのとき、四つあみをおぼえはじめていて、それにむちゅうになっていたので、こりてもこりずにひとりでかみゆい草をさがしまわったが、どこもかもとられたあとだった。

そんなある日、となり村三角山さんかくやまのふもとの大ツツミ部落すに住すんでいるいとこの六松ろくまつが、わたしの家へやってきた。

六松はそのとき二年生だった。

六松はわたしがかみゆい草をほしがっていると聞き、きゆうに、小さな魚をななめにつけたような目を、まるい顔の中でニヤニヤさせて、

「おらとこのたんぼのまわりにゃあ、かみゆい草なんかいっぱいあるわ、こんだの日にちようにとれえこい」

六松はいつになくしんせつそうにいった。

わたしはなんとなく、あれっと思った。

六松はわたしの家へくるときはいつも、山のみやげをたんまりしょってきてくれた。わたしの好きなイタドリやスイコもわずれずにとってきてくれた。わたしはイタドリやスイコに塩しおをつけて生なまで食べるのがとても好きだったので、六松のくるのがたのしみだった。

ところが六松は、どういうわけか、わたしの顔を見ると、いつもおこっているような顔になる。わたしはそんな六松に腹はらを立て、

六松六本ろくでなし、

一本二本三本四本五本六本、

どいつもこいつもろくでなし。

と、らんぼうな口をきいてからかった。

すると六松も、

吹ふいても吹ふいても鳴ならなんだ。

笛ふえ（三江）は笛でも鳴ならねえ笛だ。

鳴ならねえ笛はたたっこわせ、

たたっこわして火にくべろ。

と、まけずにやりかえしてきた。

「二江と六松はどうしてけんかばかりするやら、相性がわるいわけでもねえが」
わたしの祖母はそういつて首をかしげた。

ずーっとあとになってわたしは、人の相性について聞いたが、十二支（えと）の中で、犬と猿、己と寅というふうに、えとで、相性がいいとかわるいとかむかしからきまっているということだ。わたしはそんなばかなことはないと思ったが、祖母はそれをかたく信じているふうだった。

あるとき六松は、ニヤニヤしながらわたしに近づいてきた。わたしはちょっとへんに思った。と、そのしゅんかん六松はわたしのふところの中へ、大きなヒキガエルをほおりこんだ。わたしは大声で泣きわめいた。そのときのわたしの泣き声があんまり大きかったので、近所の小母さんたちがなにごとかとび出してきたほどだった。わたしはそれからもちよいちよい、六松にこれとおなじような目にあわされた。そんなわけでわたしは、このごろでは、六松がニヤニヤわらっているときは用心するようになった。

でも今はちがう。かみゆい草ほしきであたまがいっぱい。どんなおっかないものが出てきてもへいきなような気がした。

つぎの日（にち）ようびの午後、わたしは、家から半里（はんり）（約二キロ）ほどはなれた三角山のふもととの六松の家へいった。

三角山のふもとには、六松の家を入れてたったの三戸の家が、田や畑の中にぼつんぽつんと立っていて、山ぎわには、村じゅうの飲料水（いんりょうすい）やら田に引く水やらをためたツツミという大きな池があった。

六松はわたしをすぐ田んぼのあぜへつれていった。

「あつ、かみゆい草だ！」

大きな池がそばにあるためか、川には水があふれていてどここのあぜ草もみんな丈たけがながい。その中に、あつちにひと株こつちにひと株かよかみゆい草がふさふさしていた。わたしは、ひと株のかみゆい草にとびつきしゃがみこんだ。

「もっとながいやつのあるところへいけや」

六松はなぜかあわてたようにいった。

「まだながいやつってどのくれえ？」

わたしはかみゆい草を両手りょうてでにぎったままいった。

「二江ふえのせいくれえだ」

「え！ そんなにながいかみゆい草？」

「うん」

六松はこくんとうなずき、さっさと歩きだした。さあ、わたしは、そんなながいかみゆい草で四つあみがあるかと思うと、胸がワクワクしてきて、あわてて六松のあとを追った。

すると六松はわたしをふりかえり、さっきのようにニヤニヤした。わたしはその六松のニヤニヤがきゅうに気になりました。

山バトやカッコウ鳥が近くでないてはいたが、あたりには人かげといたら六松とわたしのふたりきり。まわりの青田が青みどろを浮うかせて、暑いあつ日を照てりかえしているばかり、もしここで六松にへビでもあび

せられたらどうしよう。わたしはあたりをキョロキョロ見まわしながら身がまえるようにした。

「二江―早くこい」

六松にせかされ、思わずひと足ふた足ふみ出したわたしは、何かに足をすくわれ、前のめりにぼったりたおれ、そのひょうしに片足かたあしを青田の中へつっこみ、わらざうりをその中へ落としてしまった。はな緒はなにあかい布を織りこんだそのわらざうりは、きのう初はつおろしをしたばかりだった。

「ああやっと、二江を引っかけたぞよう。なんしろこのごろじゃあ、東のおじいも西のおじいもよけてとおちちまって、ちっとも引っかからなんだに」

六松はキャッキャッとわらってよろこんだ。

あぜ道の両がわのかみゆい草を六松が三つあみにして結び、その上をはかの草でかくしてあったので、わたしはまんまと引っかけられてしまったわけだ。六松のいうには、いつもこうしておけば、田の見まわりにやってくる東のおじいも西のおじいも足を引っかけてよくころんだ。ところがあんまりたびたびだったので、おじいたちはこりて、このごろではよけてとおるようになってしまったとか。

「かみゆい草で人をひっかけたのはこれで十回めさ。ちよっきりのかんじようになったで、こんだからやらねわ。へっへへ」

六松はちよつとわるそうにわらった。

「六松のばか！」

わたしはそうと知り、いきなり立ちあがり、六松をぶとうとしてハッとした。

六松はわたしの泥だらけになったわらぞうりを田んぼの中から引きあげ、あぜのよこの川ですすぎ、振って水を切るとだいじそうにあぜ草の上へおき、日にあてた。その手ぎわが早かったので、わたしはつい見とれ、ふりあげた手をおろした。

「かわくまで、おらのぞうりをはけ！」

六松はかかとのほうが切れているきたない自分のわらぞうりをぬいでいった。

「あっぱっぱははは」

わたしは、六松のこまったような顔がおかしくなって、わらいだしたら、わらいがとまらなかった。すると六松まで、わたしのわらいにつりこまれて、わらいだした。

「おら、はだしのほうが気もちがいい」

わたしは六松といっしょにはだしになった。

「ああ、ふんとながいにかみゆい草！」

わたしのせいほどはなかったが、今までにこんなながいかみゆい草なんて見たことがなかった。わたしはもうむちゅうで株のまま四つあみをあんでいった。

「やい、四つあみかあ、おらにもおせえろ」

わたしと六松は、四つあみのあみつくらをした。わたしはそれから、もも、われもし、まだも心ゆくまで結った。

「あれっ、日がへえちまった」

